

## ジョージ・イブラヒムインタビュー：『パレスチナ、イヤーゼロ』での抜きん出た演技力で主演男優賞を受賞

一人のパレスチナ人俳優がイスラエルのステージに舞い戻った理由とは

出典：Al-Monitor 「ISRAEL PULSE」

スコット（仮庵祭）期間中に開催された二つの重要な文化イベントでの大賞受賞者の顔ぶれには多くのアラブ人アーティストが含まれていた。ハイファ映画祭では、パレスチナ人映画監督マハー・ハッジの『Personal Affairs』が最優秀長編映画作品賞を受賞し、最優秀長編デビュー作にはマイサルーン・ハンムードの『Not Here, Not There』が選ばれた。その数日前に開催されたアッコ・フリンジ・シアター・フェスティバルでは、パレスチナ人俳優ジョージ・イブラヒムが『パレスチナ、イヤーゼロ』での演技で主演男優賞を受賞した。

ミリ・レゲヴ文化・スポーツ大臣による抑圧的な介入直後に、パレスチナ人アーティスト達が数々の賞に輝いたことはイベント主催者にとって誇るべき名誉だった。フェスティバル開始目前、レゲヴは俳優イナト・ヴァイツマン作の『パレスチナ、イヤーゼロ』がイスラエルを中傷し、国の象徴を揶揄する内容か否かを国が調査すべきだと、公に抗議した。

ヴァイツマンの作品で主演を務めたのは、イスラエルテレビ創世記に放映された人気子供向け番組『サーミーとスूसー』の「サーミー」としてお馴染みのパレスチナ人俳優ジョージ・イブラヒム。イブラヒムは何年にも渡り、俳優としてイスラエルのお茶の間を賑わせてきた。しかし、第一次インティファダ（1987年）勃発後、彼はイスラエルでの活動を休止。1993年にオスロ合意が締結され、対立に終止符が打たれたかのように見えた頃のエルサレムのハーン劇場とアラブ系のハカワーティー劇場の共同制作『ロミオとジュリエット』への出演を除けば、彼は活動休止以来、イスラエルの観客の前に姿を現していない。

アッコ賞受賞後初となるアル=モニターとのインタビューでイブラヒムは、今回の作品の脚本を読み、活動休止を打ち切ってイスラエルでのイベントに出演することを決めたと語った。彼が演じるのは、パレスチナ人住居の破壊被害を記録していく不動産鑑定士だ。彼の報告書に誰も目もくれないが、それでもなお破壊の惨状を歴史に残すため、被害を記録し続ける。この鑑定士の物語は、俳優個人の物語とも重なるところがある。

「こうした作品に出演し、自ら声を上げ、紛争の反対側で何が起きているかを伝えること。それが私の使命だ。なぜならユダヤ人はそれを知らず、知ろうともしない。たった一握りの人にでも訴えかけることができればそれは成功に値する」と彼はアル=モニターに語った。「私は「イスラエルの街」ラムレに生まれ、2歳でヨルダンに亡命した。1967年の戦争【訳者註：第三次中東戦争】で二度目のイスラエルの征服に遭った。逃れることのできない、終わりなき「ナクバ」について私は伝えているのだ」。

イブラヒムは、テロ組織パレスチナ解放人民戦線（PFLP）の創立者ジョージ・ハバシュの甥に

当たる。『サーミーとスूसー』がイスラエルでテレビ放映され、イブラヒムが——ユダヤ人、アラブ人から等しく——国民的人気を博していた時、彼はハバシュとの親族関係を隠そうとはしなかった。「私は自分の親族関係を隠そうとしたことはない。私達は同じ一族からきているが歩む道は違う。私は政治とは程遠い所にいるし、それを嫌ってさえている」とイブラヒム。

1990年以來イスラエルの観客の前に姿を現していない彼は、アッコ・フリンジ・シアター・フェスティバルでの公演中、観客の顔が見えないことにひどく落胆した。「私が演じる役は、物語を理解していない観客への怒りも抱えている。彼らの反応がとても気になっていたのに、照明で目が眩んでしまった。しかし、公演後に作中に出てきた数字や物語が明らかにする真実に驚いたと多くの観客に感謝され、自分はしかるべき場所で、演じるべき芝居に出演し、しかるべき主張を持っていることを確信した」。

現在の外交関係の中で、パレスチナとイスラエルの劇場間での協力はあり得るか、また両国のアーティストを巻き込んだ共同制作を通して「双方の共存は可能だ」というメッセージを発信できるか、という質問に対してイブラヒムは「それは無理だ。双方は互いへの信頼というものがまるでない。我々は勢いを失ってしまったし、イスラエル人とパレスチナ人が近々共同で何かをやるということは考えにくい。なぜならそれは必然的に正常化を意味し、それは占領側と被占領側の関係ではあり得ないからだ。またそれとは別に、それは実現すべきでない事だと思う」。

「両国の共存」という前向きなメッセージを発信していた『サーミーとスूसー』への出演は、自身の若さからくる無邪気さと野心に依るものだったと彼は語った。「私はまだ子供だったし、政治のことなど考えていなかった。私はただキャリアを築こうとする一人の若い俳優に過ぎなかった。当時の年齢なら、その無邪気さは正当化されたかもしれないが、成長して番組を離れた。政治ゲームに加担するプレーヤーでいるのをやめたいと思ったからだ。ただ、19歳だった当時、自分がやっていることに充実感を得ていたことは事実であり、後悔はしていない」。

『サーミーとスूसー』は1974年に放送終了となり、イブラヒムはイスラエルのテレビ業界を去り、ヨルダン川西岸地区の都市ラマッラーで子供や大人のためのアルカサバシアターを創立した。また8年前には、ラマッラーで演劇学校も立ち上げた。西岸地区のパレスチナ人は厳しい現実と日常的に隣り合わせの状態だが、街まで演劇を観に来る観客層を形成することに成功したとイブラヒムは言う。彼はほぼ毎日エルサレムからラマッラーに通い、時にチェックポイント【註：イスラエル軍の検問所】や夜の運転を警戒し、このパレスチナの都市で夜を過ごすこともある。

イブラヒムは、最近イスラエル国民保険機構にマークされていることを明かした。イブラヒムは自宅のあるエルサレムで毎晩過ごす代わりに、ラマッラーで寝泊まりしていることを国民保険機構の探偵が突き止めたのだ。結果、イブラヒムの保険給付の差し止めが決定した。「彼らはこういった。『あなたは在留外国人だ』と。私は一生涯保険料を払い続けてきた。70になって給付を受けるべき今、在留外国人呼ばわりされ、制度から弾かれてしまった。仕打ちを受けたのは私だけではない。家族全員の国民年金も差し止めとなった。彼らを突き動かしている動機はただ一つ。それはエルサレムに住むパレスチナ人を一人でも多く追い出すことだ。そんな状況の中で、

パレスチナ人とイスラエル人が手を取り合って協力できるはずだ、なんてとんでもない。私は長いことエルサレムで暮らしてきた。1964年从这个都市にいる。やつら [イスラエル] がエルサレムを占拠する前のことだ。私はエルサレム市民として人生の大半を過ごしてきた。そして、この年齢で彼らは私に『出て行け!』と言いつつ放ったのだ。

『パレスチナ、イヤーゼロ』での演技でイブラヒムに送られた賞について審査委員会はこのようにコメントしている。「謙虚さ、誠実さ、率直さと、優れた繊細さ、力強さと真っ直ぐ先を見つめる視線でイブラヒムは自身の、そして同志のアーティスト達の物語を語り、観客はそれに耳を傾けずにはられない」。

和訳：相磯展子 (Art Translators Collective)